

杜子春と精神分析

— 苦行のパラドクス —

岡田暁宜

保健管理センター

‘Toshisyun’ and Psychoanalysis — The paradox of asceticism —

Akiyoshi OKADA

Center for Health Care, Aichi University of Education

キーワード：杜子春, 苦行のパラドクス, 中立性, 欲動, 罪悪感

I. はじめに

『杜子春』は芥川龍之介が中国の唐代伝奇の一つの『杜子春伝』を元に創作した物語である¹⁾。芥川の杜子春テーマは、原作の杜子春と若干異なっている。杜子春の物語は、欲望、恩、道徳、愛、苦悩、罪悪感など、人間の本質を見事に描写している。杜子春の物語は、人間の無意識と関係を扱う精神分析の本質に迫るものがある。本論文において、筆者は精神分析的視点から杜子春を考察し、さらに精神分析療法の諸原則について論じたい。

II. 杜子春の概要

芥川龍之介の杜子春は、計六部からなる短編である。第一章では、春の洛陽の夕暮れの場面から始まる。元々裕福な家に生まれた杜子春は、財産を費い尽くして、貧困で憐れな身分になる。そして「死んでしまった方がましかも知れない」と絶望の淵にたたされる。そこへ片目眇の老人が現れて、杜子春に声をかけたところ、杜子春は自分が途方に暮れていることを正直に答えた。すると老人は同情心から杜子春に黄金のある場所を教える。

第二章では、黄金を手にした杜子春の贅沢な生活が始まる。だが杜子春は財産を費い尽くし、再び貧乏になる。そして財産が目当てで杜子春に近づいていた人々が立ち去って行くと、杜子春は再び孤独になる。すると老人が再び現れて、同情心から杜子春に再度黄金のある場所を教える。再び金持ちになった杜子春は、また贅沢を始めて、前回と同じように、貧困になり孤独を体験する。

第三章では、老人が再々度杜子春の前に現れて、黄金の場所を教えようとするが、杜子春はそれを断る。

杜子春は人間の薄情さを実感して、「人間に愛想が尽きた」という。その様子をみた老人は感心した。杜子春は人間の薄情さに嫌気がさすのだが、貧乏暮らしを受け入れることもできず、老人のような仙人になりたいと老人に申し出た。老人は自分が鉄冠子という仙人であることを認め、杜子春を弟子にした。老人はたとえ弟子になったとしても、仙人になれるかは自分次第だと告げて、杜子春を連れて嵯眉山へと向かった。

第四章では、嵯眉山での苦行の様子が描写されている。鉄冠子は、「たとえどんなことが起ころうとも決して声を出してはいけない。一言でも口を利いたら仙人にはなれないぞ」と言って、杜子春を嵯眉山の絶壁に残して立ち去った。

その後、虎や白蛇、雷や雨や風が杜子春を襲った。だが杜子春は恐怖と戦きながらそれに耐え抜いた。やがて神将の訊問に答えないう杜子春を攻め立てた。だが杜子春は鉄冠子の「決して口を利くな」という言葉を思い出して、沈黙を守った。ついに杜子春は神将の鎗で突き殺された。

第五章では、杜子春の魂は地獄の底へ辿り着く。そこで閻魔大王は杜子春が嵯眉山にいた理由を訊問するが、その都度、杜子春は鉄冠子のあの言葉を思い出して、沈黙を守り続けた。杜子春は剣に貫かれたり、皮を剥がれるなど、凄まじい苦しみを味わわれるが、杜子春は我慢強く決して口を利かなかった。ついに閻魔大王は、畜生道に落ちていた杜子春の両親を杜子春の前に連れてきた。痩せ馬となっていた杜子春の両親を鬼達は責め立てた。だが杜子春は頑なに目を閉じて鉄冠子のあの言葉を思い出して、沈黙を守り通す。その時、母親の微かな声が杜子春に聞こえた。それは息子の幸せのために自らが犠牲にあることを本望だという母親の懐かしい声であった。母親の声は沈黙を貫き通

すように杜子春に語りかけた。ふと見ると一匹の馬が悲しそうに杜子春を見ていた。

杜子春は自分が感じた人間の薄情さに比べて、この上ない感謝の念を抱き、鉄冠子の言葉を忘れて、「お母さん」と一声を叫んだのである。

第六章では、再び洛陽の夕日の場面に戻る。老人は杜子春は弟子になったが、仙人にはなれないことを微笑みながら告げた。杜子春は目に涙を浮かべていた。杜子春は自分が仙人になれないことを認めて、だがそれが嬉しいという。杜子春は仙人になっても、鞭で打たれる父母を見て黙っているわけにいかないという。老人は杜子春がそれでも沈黙を守り抜いたら命を絶つつもりだったことを厳かな顔で告げた。杜子春はこれからは正直な暮らしをすることを晴れ晴れと語った。老人はもう二度と会うことはないと言って、立ち去ろうとするが、今一度、振り返って自分の家と畑を杜子春に贈ったのである。

Ⅲ. 杜子春と精神分析

1) 杜子春の病理

裕福な家に生まれた杜子春は幼い頃から欲動 (drive) の満足が可能環境の中で育ったのだろう。杜子春は自らの財産を適切に管理にできないようである。これは欲動の制御不全の病理の表れであり、杜子春の肛門期性格 (anal character) がうかがわれる。杜子春の性格形成には両親の関与が大きく、両親は杜子春の万能感を満たしてきたのだろう。それは第5章で杜子春の両親が畜生道に落ちていたことから推測できる^{注)}。杜子春の両親は生前中に人の道に反する何らかの罪を犯していたに違いない。それはおそらく仁 (humanity) に触れる罪であろう。

第一章で、両親と財産を失い、その日の暮らしにも途方に暮れていた杜子春は、まさに絶望の淵に立たされていた。杜子春は喪失に伴う軽い抑うつ状態にあったと思われる。だが杜子春は財や富への欲望を捨て切れなかった。財や富への欲望 (desire) は欲動の表れである。第二・三章で、杜子春は折角老人から授かった財産を二度に渡って費い尽くしてしまうが、これは欲動の制御不全の病理でみではなく、両親との関係の再演 (enactment) と思われる。そこには両親への同一化とその背後にある裕福であった両親への思慕の念がうかがわれる。

さて片目眇の老人は、杜子春に対して最初から同情的であった。老人は自分が与えた財産を杜子春が二度に渡って費い尽くしても杜子春の力になろうとした。この老人の様子は、杜子春を優しく養育する親イメージとして描写されている。片目眇の老人は、杜子春の内的な親イメージが投影された外的対象であるかも知れない。また老人の片目眇から、老人の“一視同仁”

の生き方がうかがわれる。片目眇の老人は、老賢人 (old wise man) の元型 (archetype) であると考えられる。その一方で、片目眇には傷つきのイメージがある。つまり傷ついた癒し手 (wounded healer) という元型であると思われる。老人が杜子春を支援する背景には、傷つきをもった老人が仙人になる前の自分を杜子春の中に見ていたのかも知れない。これは老人の杜子春に対する投影であろう。

2) 仙人への道一苦行のパラドクス

自分が仙人であることを明かした老人は、杜子春の願いを聞き入れて杜子春を弟子にした。だが弟子になってもすぐに仙人になれるわけではなかった。仙人は如何なることがあっても一切口を利いてはいけないと杜子春に戒めた。その後、仙人は杜子春に激しい苦痛や恐怖を与える。杜子春は虎や白蛇、神將の責めに耐え抜き、自らの死さえも耐え抜いた。さらに鬼が両親を打ち砕くが、それでも杜子春は耐え抜く。そこには杜子春の強い意志 (will) がうかがわれる。杜子春が仙人になりたいと思った動機は、人間界における絶望による人間界から逃避することであるが、その背後には仙人がもっている仙術を得たいという欲望があると思われる。それは万能感への憧れである。さらに苦行の中で杜子春が口を利かない様子は意志を越えて、意地 (obstinately) であったと思われる。既に述べた杜子春の肛門期性格の考えると、恐怖や苦痛に耐える様子は、杜子春の意地張りや頑固さの表れでもあるだろう。

この苦行において、特記すべきことは、杜子春の意志や意地を支えていたのは、他ならぬ仙人の言葉だということである。つまり仙人は、杜子春に口を利くことを禁止しながら、同時に苦しい現実を与えて、さらに杜子春を内的に励ます対象でもあったのである。仙人の戒めは禁止系の超自我として、数々の苦行難行は現実として、仙人への憧れと励ましは、欲動と自我理想として、杜子春の自我の中で体験されたであろう。仙人が杜子春に与えた苦行は二重拘束を越えて三重拘束 (triple bind) といえるかも知れない。

この三重拘束の緊張を破ったのは、他でもない畜生道に陥った母親の有り難い言葉であった。地獄の鬼に打ち砕かれながらも母親は、息子への絶対的な承認と激励を杜子春に告げたのである。杜子春は我が身を捨ててまで息子を想う母親の真の愛を感じて、仙人の戒めの言葉を忘れて、母親の名を叫んだのである。これは三重拘束の緊張が解けて、苦行が終わった瞬間であった。母親の有り難い言葉によって、杜子春は自らの無意識にあった両親への愛を喚起させられたと思われる。これは杜子春の中に道徳系の超自我の機能を活発化させた。そこには罪悪感が関与したと思われる。この道徳系の超自我は、杜子春の欲動や禁止系の超自我

を凌駕した。そして杜子春は自らの欲望に打ち勝って両親への愛を選択した。つまり杜子春は「仁」の道を選んだのである。これが仙人になるための苦行の結末であり、苦行の過程は杜子春の内的成長の過程でもあった。

当初、老人は杜子春に財産を与えたが、その後、仙人であることを明かし、苦行を通じて杜子春に自我の葛藤を与えた。この葛藤を内的に解決する過程こそが、苦行の意味であった。苦行に耐えられなかった杜子春に対して仙人は自分の畑と家を贈った。杜子春が罪悪感を抱いたことが苦行の成果ともいえたが、これは罪 (guilt) が贈り物 (gift) に変換されたといえるかも知れない。

苦行において、杜子春は仙人の戒めを守ることができなかったにも関わらず、仙人から許された。この苦行において仙人の戒めを解くことが苦行の真の意図だったのだろうか。この点は一考を要する。筆者は仙人の戒めを積極的に解くことが目標あるいは正解なのではなくはなく、仙人の戒めを守ろうと努力しても、結果的に守れなかったことが、この苦行の要諦であると考えている。つまり仙人の戒めを解くことが苦行の目標ではなく、あくまで結果なのである。その意味において、杜子春の苦行は極めて逆説的である。杜子春の苦行に見られるパラドクスを『苦行のパラドクス』と呼ぶことができるだろう。

苦行のパラドクスは、からくりやトリックとは明らかに異なる。からくりやトリックには、“虚”こそ“実”であるというような目くらましの意味ある。からくりやトリックは意図的・意識的な力動であるのに対して、苦行のパラドクスは、非意図的・無意識的な力動であるといえる。

苦行のパラドクスは、悟りを得る前の釈迦の苦行の逸話にも見られる。釈迦は長い間死の境を歩き来するような激しい苦行を続けたが、苦行のみでは悟りを得ることができず、衰えた身体を清めるためにやっとの思いで尼連禪河に辿り着いた。まさに命尽きようとしていた釈迦の元に、偶々通りかかった村娘のスジャータが近づき、神への供物である乳糜を釈迦に捧げた。釈迦は苦行を忘れてそれを食した。その後、釈迦は河の対岸の菩提樹の下で、坐禅をして真理を悟ることができたのである。そこには杜子春の苦行に類似する釈迦の内的変化が見られる。

苦行のパラドクスの力動は、精神分析療法の過程においても観察することができる。以下に、精神分析療法における戒めについて論じたい。

3) 精神分析療法における“戒め”

精神分析療法では被分析者は自由連想 (free association) を行い、分析家も自由連想を用いる。治療空間は自由連想を行う空間なので、基本的に自由であ

るはずだが、決して自由ではない。それはいくつかの基本原則があるからであろう。その一つに禁欲原則 (abstinence rule) がある²⁾。神経症は現実には充たすことのできない欲求の満足の挫折によって起こり、患者の症状形成には、この欲求に対する代理満足の意味があると考えられている。患者が治療者に向ける転移の中に表れる患者の欲求を充たしてはいけないというのが、禁欲原則の基本である。さらに治療者が逆転移によって、治療者が患者に向ける欲動を充足することに対する治療者自身に対する戒めでもある。Menninger, Kは精神分析療法の第一原則を自由連想と考えた³⁾。精神分析療法は無意識の欲動を意識へと解放することを目標としている。さらに精神分析療法の第二原則を禁欲原則と考えた³⁾。精神分析療法の目標は、解放された欲動を洞察することで、欲動を内的に制御可能にするのであり、欲動を外的に満足することではない。この二つの原則は「解放せよ、だが満たしてはならぬ」というものである。これは治療的二重拘束 (therapeutic double bind) と言えるかも知れない。これは精神分析療法自体の構造によってもたらされる葛藤である。つまり精神分析療法におけるパラドクスといえるだろう。

精神分析の基本姿勢の一つに、中立性 (neutrality) がある。これはFreud, Sの基本的な治療態度である²⁾。つまり分析家は社会的、道徳的、宗教的価値に中立でなくてはならない、いかなる転移に対しても中立でなくてはならない、理論的偏見によって特定の心の部分や特定の意味に執着してはならない、というものである。Freud, Sの中立性は精神分析療法の隠れ身つまり匿名性 (anonymity) に基づくものである。これは、治療態度における中立性であり、古典的中立性といえるだろう。これはむしろ禁欲原則に近い概念である。この中立性は杜子春の物語において「如何なることがあっても決して口を利いてはならない」という戒めに類似している。これは精神分析療法における戒め (ban) ともいえるだろう。

その後、Freud, Aはエスと自我と超自我に対して等距離を保つことを中立性と提唱した⁴⁾。この中立性は技法的中立性 (technical neutrality) といえる。だがこれはエスと自我と超自我のどの領域にも傾いてはいけないという考えである。これは永世中立国のように他国に干渉しないことであり、静的中立性 (static neutrality) といえるだろう。

その後、中立性は自我心理学が盛んな米国の精神分析において、ある意味で超自我的に遵守され続けた。だがその米国で精神分析療法における匿名性や中立性に対抗する考えとして自己開示 (self-disclosure) の概念が注目されるようになり、中立性をめぐって大きな論争を呼んだ⁵⁾。中立性や自己開示の是非に関する議論の中で、中立性の概念はさらに洗練されたといえ

る。つまり上述の古典的・静的な中立性に対して、現代の精神分析の中立性は、動的な中立性 (dynamic neutrality) といえる。これはそれまでの基本原則に反するものではない。これは精神内界および治療関係における様々な事象が絶対主義から相対主義へと移行したことに関係しているだろう。

精神分析的臨床において、重要なことは何を言ったか、何をされたかということではなくて、その瞬間に患者の精神内界および治療関係の中で何が起きていたのかということである。さらに精神分析的臨床において、治療者がいつもはしないこと (例えば、助言をしたり、家族と連絡をとったりするなど) を無意識的に思わずしてしまった瞬間に起きている治療関係の中に治療的ポテンシャルがあるということが報告され始めた。これは上述の精神分析療法における戒めの中で、その戒めを解く瞬間の力動である。Hoffmann, Iは精神分析における儀式 (ritual) と自発性 (spontaneity) の弁証法的関係について考察している⁶⁾。儀式と自発性が適度の緊張を保ちながら、自発性を発揮できる瞬間にこそ、生きた心の交流が起きると思われる。杜子春の物語では、杜子春が仙人の戒めを堅く守り続けた上で、無意識的に思わず口を利いてしまった瞬間に、杜子春は人の心を得ることができた。杜子春の苦行は確かに失敗に終わったが、しかし失敗によって杜子春の心は成長を遂げたのである。これは苦行の目的ではなく、やはり苦行の一つの結末というのが良いだろう。これは精神分析療法の本質なのかも知れない。

4) 愛すること—二つの杜子春—

冒頭で述べたが、杜子春には原作の杜子春伝と芥川の杜子春との二つの物語がある⁷⁾。仙人になるための苦行の意義はこの二つの杜子春で若干異なっている⁸⁾。その対比についての筆者の理解を表1に示す。

芥川杜子春では、仙人になるための苦行に入る意識

表1

芥川の杜子春	原作の杜子春
<苦行の動機> [意識的] 人間界からの逃避 [無意識的] 仙人への欲望	[意識的] 仙人への感謝と恩 [無意識的] 自我理想の追求
<苦行の意味> 治療的意義 愛を忘れないこと 愛は修行に必要なもの フロイト的「愛」 苦行パラドクスあり	試練的意義 愛を超えること 愛は修行を妨げるもの ビオンの「愛」 苦行パラドクスなし
<苦行の結末> 苦行の失敗? (副次的に幸福を得る) 欲得から凡欲へ 人間としての成長と幸福	苦行の失敗 (脱欲の難しさの洞察) 自我理想から現実自我へ 人間を超えることの難しさ

的な動機は、人間の薄情さを知って、人間界からの逃避することであるが、より無意識では、仙人のもつ仙術を得たいという欲望がうかがわれる。これに対して、原作杜子春では、仙人に対する憧れと感謝が意識的な動機になっているが、より無意識では、仙人像が杜子春の自我理想になっていると思われる。

仙人が杜子春に与えた苦行の意味は、芥川杜子春では、欲得から凡欲へ移行する過程であり、決して脱欲を極めるものではない。これに対して原作杜子春は、脱欲を目指す、脱欲の難しさを知ることである。

二つの杜子春では、愛の位置づけが大きく異なる。芥川杜子春では、親からの愛を決して忘れてはならないものとして描写されている。それはまさに「仁」である。これに対して原作杜子春では、人間にとっての愛を超えることの難しさが描写されている。精神分析において、愛はしばしば論じられる。Freud, Sは人間の性愛欲動は自体愛 (auto-erotizm), 自己愛 (narcissism), 対象愛 (object love) へと発展する図式を考えた。またFreud, Sは「愛すること」と「働くこと」を人生で最も大切なことだと考えていた。芥川杜子春の苦行は、基本的にFreud, Sと同じ立場に立っているといえる。

これに対してBion, W.R.の愛に対する考えは、Freud, Sの考えと若干異なる。Bion, W.R.は対象関係のあり方を三つの要素に分けて考えた。それはL (love), H (hate), K (knowing)である⁹⁾。Bion, W.R.は愛すること (L) さえも真実を知ること (K) の妨げになると考えて、精神分析療法の目標を究極の真実 (O) を追求することと考えたのである。原作杜子春における苦行には、愛や憎や恐など人間の本質の全てを超越することへと向かう姿勢が描写されている。原作杜子春の苦行は、Bion, W.R.の立場に立って愛を捉えていると考えられる。その究極の真実へ到達する難しさを知ることが原作杜子春における苦行の結末である。

また仙人が杜子春に与えた苦行は、杜子春にとってどのような意味があったのだろうか。芥川杜子春では人間の薄情さを知り不信心を抱いていたが、苦行は杜子春に対する治療的な意味が大きかったといえるだろう。これに対して原作杜子春では、自我理想に基づく仙人への憧れを抱いていたが、苦行は試練的な意味が大きかったといえるだろう。

5) 杜子春と夕鶴—禁止の力動性—

杜子春は、仙人になるための苦行において、仙人の戒めを解いてしまった。これは禁止を破ったことである。禁止を破ることは、木下順二の『夕鶴』の中にも垣間見ることができる¹⁰⁾。夕鶴について簡単に紹介する。

つうは助けてもらったお礼に与ひょうのために機を織る。つうは機を織っている間、決して機織り小屋を

覗いてはいけないと与ひょうに戒める。しかし与ひょうはつうの戒めを知っていながら、機織り小屋の中を覗いてしまう。それを知って、つうは与ひょうのもとを去っていく。

北山は夕鶴の物語に見られる病理を“見るなの禁止”と呼んでいる¹¹⁾。この禁止は、杜子春の物語における禁止とは若干異なると思われる。その対比についての筆者の理解を表2に示す。夕鶴では“見るなの禁止”であるのに対して、杜子春では“喋るなの禁止”である。見ると見られるは、健全な自己の発達において、欲動の発達と関連して現実の行動の中に表現される。例えば相手の持ちものを見て喜んだり、自分の衣服や作品を見せて喜んだりすることである。もし見ることでの欲動満足が倒錯の形態をとると窃視症 (scopophilia) となるし、見られることでの欲動満足が倒錯の形態をとると露出症 (exhibitionism) となる。

夕鶴に見られる“見るなの禁止”は基本的に欲動と超自我との間の葛藤を引き起こす。夕鶴では妻に対する欲動は、その妻によって戒められている。夕鶴における禁止は、与ひょうと妻の二者関係における禁止である。この禁止を破るのは、与ひょうの欲動である。そこで発生する罪悪感、自らの欲動によって恥をかかせて対象を破壊したことへの罪悪感である。

これに対して杜子春における喋るなの禁止は、苦行による外的現実や両親への罪悪感と自我との葛藤を引き起している。これは杜子春と仙人と両親の三者関係における禁止である。この禁止を破るのは、杜子春の罪悪感である。そこでの罪悪感、道徳を形成する禁止系の超自我による罪悪感である。

表2

杜子春	夕鶴
喋るなの禁止 修行における禁止 (苦痛、恐怖などの責め) 戒め(仙人からの禁止) 三者関係的 口を利くと仙人になれない 禁止を破るもの: 罪悪感	見るなの禁止 日常生活における禁止 (女性に関する秘密) 戒め(妻との約束) 二者関係的 見ると別れが来る 禁止を破るもの: 欲望

6) 杜子春とアブラハム—試練における葛藤—

次に杜子春の物語を葛藤という視点から考察する。それには杜子春と創世記との対比が有用である。旧約聖書の創世記22章1節～19説にイサクの生贖の話が記されている。その対比についての筆者の理解を表3に示す。イサクの生贖について簡単に紹介する。

ノアの子孫であるアブラハムが百歳の時、九十歳の妻サラとの間に息子イサクが生まれた。アブラハムはイサクに深い愛情を注いだため、神はアブラハムの神への信仰を試すために、イサクを生贖に捧げるように命じた。アブラハムは神を信じて子供を捧げようと息

子に手かけようとする。その瞬間、神の使いが現れてアブラハムを止めた。神はイサクの死を望んでおらず、ただアブラハムの信仰を試しただけだった。

創世記に登場するアブラハムの葛藤は、自らの神への信仰のために最愛の息子を殺めるか否かという葛藤である。これに対して芥川の杜子春の葛藤は親を見殺しにするか否かの葛藤である。そこには親殺しと子殺しの罪の違いがあるだろう。創世記では、アブラハムは自らの信仰に従って、最愛の息子の殺めようとすることで、神に許されて、その試練の結末を迎える。これに対して芥川の杜子春では、親を見殺しにしないことで、仙人に許されて、苦行の結末を迎えたのである。

許しをめぐって双方の間に違いがあるが、それは思想や文化の違いがあるだろう。杜子春の背景にあるのは儒教思想である。儒教は人為に重きをおいた人間中心の思想であり、仁を重視している。それは祖先や親への愛や道徳である。これに対して旧約聖書におけるユダヤの神は、絶対的な存在であり、我が子よりも優先されるべき存在である。

表3

杜子春	創世記
<苦難> 仙人になるための苦行	<苦難> 信仰のための試練
<禁止> 決して口を利いてはいけない : 欲動の制止	<お告げ> 息子のイサクを生贖にしる : 欲動の促進
<杜子春の行動> 仙人との約束を守れない	<アブラハムの行動> 神のお告げを守ろうとする
<結末> 許される	<結末> 許される
<残されたもの> 道徳	<残されたもの> 絶対的信仰

IV. まとめ

本論文において、筆者は芥川龍之介の『杜子春』について精神分析的視点から考察し、精神分析療法の諸原則について論じた。1) 杜子春の苦行にみられたパラドクス(苦行のパラドクス)は、精神分析臨床における治療機序にも関連する重要な概念であると考えられた。2) 儒教における仁は、道徳との関連性が高く、精神分析的には超自我の力動で説明されるが、精神分析臨床における共通基盤とも考えられる。

注) 畜生道とは、仏教における六道輪廻(Transmigration in the six worlds)の一つである。人は死ぬと、生前の罪により、地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人間道、天道の六つのいずれかに転生する。

V. 文献

- 1) 芥川龍之介：杜子春，角川文庫，角川書店，1983.
- 2) 小此木啓吾【編集代表】：精神分析事典，岩崎学術出版社，2002.
- 3) Menninger, K：Theory of Psychoanalytic Technique, Basic Books, New York, 1958；小此木啓吾【訳】現代精神分析双書，精神分析技法論，岩崎学術出版社 1995.
- 4) Freud, A: The Ego and the Mechanisms of Defense, Hogarth Press, London, 1937；黒丸正四郎・中野良平【訳】アンナ・フロイト著作集 2，自我と防衛機制，岩崎学術出版社，1982.
- 5) Greenberg, J: Self-disclosure: Is it Psychoanalysis? Contemporary Psychoanalysis, 31: 193-205, 1995.
- 6) Hoffman, I.Z.：Ritual and Spontaneity in the Psychoanalytic Process – A Dialectical-Constructivist View, Analytic Press, 2002.
- 7) 今村与志雄【訳】：唐宋伝奇集〈下〉，岩波文庫，岩波書店，1988.
- 8) 渡部芳紀：作品論「杜子春」，国文学－解釈と教材の研究，特集芥川龍之介の手帖，臨時増刊号，学燈社，1972.
- 9) Symington, J. Symington, N.：The Clinical Thinking of Wilfred Bion – Makers of Modern Psychotherapy, Routledge Pub. 1996.；森茂起【訳】ビオン臨床入門，金剛出版，2003.
- 10) 木下順二：夕鶴，新潮文庫，新潮社，1991.
- 11) 北山修：見るなの禁止，日本語臨床の深層，北山修著作集第1巻，岩崎学術出版社，1993.

(平成17年9月9日受理)